

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年11月
第101号

(毎月1日発行)

ホームページ



ときどきは
洗濯せねば
赤い糸
(切れそうでも切れない不思議な糸)

別れのあとに泣く

お葬儀での勤めを日常としている私ですが、緊張がなくなることはありません。皆さんの別れの場に立ち会う気持ちに加えて、私自身も大変お世話になったこともあって、懐けるどころか、すればするほどに思いが深まっていく感じが致します。

今回はこの「気持ち」「思い」について書こうと思います。



ある方が亡くなって、お経に参りました。ご家族からいろいろなお話を聞いた後に私が「お兄さん、やさしかったんですね」と言ったら、妹さんが声を上げて泣きました。

夏にあつた別の方の通夜でも、生前、特に何も言っていなかったお義父さんについて「それは、やさしさですね」と私が言うと、お嬢さんが嗚咽していました。

やさしさを目で直接確かめられないこと、そして、お別れした後はつきりと気がつくこと、の2つの「残念なこと」が、むしろ私たちが生きていく上での原動力になっていくのではないかしらと思えます。

恩送り

「恩送り」という言葉は、東日本大震災の時に多く使われました。「恩返し」と何が違うのでしょうか、それは、2つあるように思います。1つ目は、恩を返す相手がもういなくなってしまうということ、2つ目は、実は返しきれない程の恩を受け取っていたということ。

こんな話があります。

私たちは母親の胎内から誕生するとき、母親の骨盤がそれ以上大きく広がらない状態で生まれてくるので、基本的に皆未熟児なんだそうです。だから、親のような身近な人によって大きくしてもらい、つまり、誰かにやさしくされないと生きていけない生き物ということなんです。

「私」今ここに存在しているという事は、私自身の努力というよりも、誰かにやさしくされてきたことの証候になっているのです。私たちが、誰かにやさしく出来るのは、「恩送り」のすがたそのものでありましょう。

先立ったご家族のやさしさを受け取られた皆様へ、次はそのやさしさをご縁のだからにそつと...願っています。
(住職)

お経のことば



《鼎命(きみよう)》

『正信偈』に出てきますね。

これは、「おまかせする」という

意味があり、インドの言葉では

「ナモ(南無)」といいます。

「信じています」とも読めます

が、意味が解つても、本当に心か

らまかせること、信じていることが

出来ますか？出来ないのがこの私だから、

これは「まかせなさい」「信じさせるよ」と

いう仏さまからの声掛けとして読むんだ、

と言ったのが、親鸞聖人です。

ちょっとあたまのこりほぐし

朝から晩まで一日中仕事をしていたら、
お給料の他にも、何かくれました。
さて、それは何でしょうか。

答えは裏面です



おてらから

のうらつぼ、2基目を建てました

先月、マンション型のお墓として、「のうらつぼ」の2基目を設置いたしました。こちらますますに満室になりそうです。ぜひお声かけくださいませ。

報恩講のおしらせ

親鸞聖人のご法手「報恩講」に参加して、お念仏をともに味わいましょう。

日時……12月5日(日)

朝席 10時～12時

昼席 13時～15時

講師……丸山 文雄 使

新潟市 万栄寺 住職・布教使

・お土産を支援しています。

・マスクをよろしくお願いいたします。

福泉寺公式 LINE
色々送ります



政治では出来ない子育て支援



一年前、毎日新聞に一人の女性が、わが子の幼稚園にまつわるエピソードを投稿していた。

幼稚園に入るまでは一日中一睡にいますので母親は子どものことを何でも知っていた。ところが幼稚園に通うようになると、子どもが園でどんなことをしているのか分からない。そのことを母親は「初めてできた秘密」と書いていた。

子どもが園から帰ってくるとカバンを開けることが一番の楽しみに変わった。園でどんなことをしてきたのか、その「秘密」を少しだけ覗けるからだ。

カバンにはいろんなものが入っていた。まず先生がその日の様子を書いてくれる連絡帳、ポケットに砂が入っている体操服、お絵かきの時間に描いた絵、いろんなものを踏んづけた上靴等々。カバンの中から出てくるものを見てみると、なんだか誇らしい気持ちになった。

そしてあっという間に3年の月日が流れ、いよいよ迎えた卒園式。泣くかなあと思っていたが、式は思ったよりも厳粛で、意外と冷静に見ることが出来た。

ところがその日、最後に持ってきたカバンの中身を見て、彼女は涙が溢れて仕方がなかった。こう書かれてあった。

「短くなったクレヨン、粘土が削り込まれた粘土板、残りわずかなのりやテープ……。どれ

もこれもうちゃくちゃになるまで使い込まれていました。新品だった道具をこんなにになるまで使ったんだね。いっぱいいっぱい遊んだね。お母さんは嬉しくて、誇らしくて、ポロポロ泣いてしまいました」

子どもの成長を目の当たりにしたとき、嬉しくもあり、寂しくもあり、言葉にならない感情が込み上げてくる。（中略）

年配の女性が、全く知らない東北の地へお嫁に来て、3人の子どもを育てていた。20代の思い出を、ある新聞に掲載していた。その記事がまたまた読んでいた津田塾大学教授の三砂ちずるとさんが著書「タッチハンガ」の中で取り上げている。

買い物帰りの夕方、2人の幼子のの手を引き、背中には乳飲み子。母親は土手をとぼとぼ歩いていった。よほど疲れた顔をしていったのだろう。向こうから来た、作業服姿のおじさんがすれ違いざまに声を掛けた。

「母ちゃん、えらいな。だけでももうちよっとの辛抱だよ。もうちよっとがんばれよ。もうすぐ楽になるからな」

そう言って通り過ぎた。若い母親の目から涙が溢れて止まらなかった。

「知らない土地で、知らない人のほんの一言に支えられて、ここまで生きてきた。今の自分があるのはあの時のおじさんの言葉のお陰だ」と綴られていた。

「日本一心を揺るがす新聞の社説」二重書房新社

みなさんのリレー朗読
青色 青光
しょう しき しょう こう

親と子 二門後さんの娘さん

夏が終わり、秋の到来とともに妙な寂しさを感じます。父と母が他界してから今年で七年。さっとこの時期は、二人とお別れをする準備をしないで済まなかった、毎日が心細かった頃の自分を思い出すからだろうと思います。

私が大半生の時に、両親の癌が見つかりました。父は脳、母は肝臓でした。医師から余命を告げられ、後はその時を待つのみという生活は、当時の私には非常に耐え難いものでした。まだ生きていて欲しいという思いから、

「七年後には東京でオリンピックがあるんだって。一緒に観に行けたら良いね。」

そんなことを言って、母を困らせた記憶があります。

その年の冬、二人の死はほぼ告知通りに訪れました。葬儀場の人に、ドライアイスで体を冷やさなくてはならないと言われたことが、二人の死をより現実味のあるものに感じさせました。ただ、私自身、悲しさのあまりどうにかなってしまふのではないかという思いとは別に、どこか冷静な自分もいました。食欲もありましたし、眠れもしました。笑うこともできました。それでも、理由もなく涙が止まらない日があり、それは当

分感しました。しかし、当時の私にとって、二人の死は間違いない「良くないこと」でした。親年行もろくにできておりませんでしたし、他の親子を見ては恨めしい気持ちにさえなっていました。しかし、七年という歳月は、不思議と私の中に変化をもたらしました。両親にしてあげられなかったことを赦え悔やむ日々から、これからの幸せを願うような日々なっていました。その大きなきっかけとなったのは、愛する我が子の誕生でした。屈託のない笑顔、大きな声で泣く姿、柔らかくてあたためたい小さな手足。全てを愛おしく感じます。こんなにも可愛く愛しきものがこの世に存在したのか、と大真面目に親バカをこじらせる毎日です。

ふと知人に言われた言葉があります。

「二両親に見てもらいたかったね。でも、二両親の死がなかったら、出会えなかった子だね。」

事実としてこの子は、二人の死が無ければ誕生し得ない巡り合わせの中で生まれてきてくれました。なぜなら、私は両親の死をさっかけに福山に戻り、就職をし、夫と出会ったからです。それを考えると、どうしても「両親の死」と「我が子の誕生」の関係性については思いを巡らせてしまいます。ですが、物事にあらゆる因果関係があったとしても、それが結果的に理解し難い関係性であったとしても、生まれてきてくれて

「良かった。ありがとうね」
この言葉に尽きます

